The 60th Annual Meeting of Japanese Society of Pediatric Allergy and Clinical Immunology

第60回 日本小児アレルギー学会学術大会

教育セミナー 5

2023
11/18 土 12:20 ～ 13:10

第 5 会場　京都市勧業館 みやこめっせ B1F
（日図デザイン博物館 ①）

小児アトピー性皮膚炎の長期管理を見据えた患者指導

座 長　今井　孝成 先生
昭和大学医学部小児科学講座　教授

演 者　二村　昌樹 先生
国立病院機構名古屋医療センター　小児科医長

本セミナーは、整理券制です。

■配布場所：京都市勧業館みやこめっせ　1階　第2展示場B/C
■配布時間：8:00～11:50
※整理券はセミナー開始5分後に無効となりますので、ご注意ください。

共 催　第 60 回日本小児アレルギー学会学術大会
株式会社シノテスト

教育セミナー 5

小児アトピー性皮膚炎の長期管理を見据えた患者指導

二村　昌樹　先生

国立病院機構名古屋医療センター　小児科医長

アトピー性皮膚炎は繰り返す湿疹病変に伴う瘙痒や睡眠障害によって、患児や家族のQOLを障害することがある。したがって寛解導入療法により湿疹が一旦改善したとしても、再燃を繰り返す場合に備えて長期的な治療戦略が求められる。

治療の基本となる抗炎症薬や保湿薬の外用は自宅で日常的に行われるため、患児および家族にしっかりと治療内容に納得して実施してもらうことが重要である。特に湿疹の治療において中心的な役割を担うステロイド外用薬については、患児への使用に不安を抱える家族も少なくないことに留意する。このような不安を消失あるいは軽減させるためには、ステロイド外用薬の効果（メリット）とともに副作用（デメリット）についても正しい情報を提供することが肝心である。治療法を押し付けることなく、複数の選択肢を示しShare Decision Makingのプロセスを経て治療方針を決定・開始する。また医療者が意図する治療が確実に実施されるように、手技についても適切に指導する。この場合、幼児期以降には保護者だけではなく、患児本人への指導も欠かさないようにして自らが治療主体となっていくことを意識づけることが重要である。

またアトピー性皮膚炎治療において、かゆみなどの主観的な症状は皮疹重症度とは必ずしも一致しないため、長期管理中の指標としては客観的指標も同時に評価することがのぞましい。客観的指標としてバイオマーカーであるTARCやSCCA2などは病勢に相関することが知られており、これらのバイオマーカーについては患児・家族と医療者の双方が同じ達成目標を共有することもできる。特にSCCA2は年齢による基準値の差がなく、乳幼児期から長期的な経過も評価できる。また近年開発された質問票のRECAPやADCTも長期コントロール指標として活用できる。小児アトピー性皮膚炎の治療ではこれらの様々な指標を用いた長期管理を可能とするような患者指導が重要であり、本セミナーでは演者が実施している指導法について解説をおこなう。